第48回
日本小児感染症学会総会・学術集会

The 48th Annual Meeting of the Japanese Society for Pediatric Infectious Diseases

ランチョンセミナー8

日時 2016年11月19日(土) 12:00～12:50

会場 H会場（岡山コンベンションセンター 4F 407会議室）

〒700-0024　岡山市北区駅元町14番1号

こどもの呼吸器感染症における ワクチンの重要性、そして新たな診断・治療戦略

座長

秋田 博伸 先生

秋田医院 院長

演者

津村 直幹 先生

久留米大学医学部 小児科学講座 講師

ランチョンセミナーは整理券制となります。

整理券配布場所：岡山コンベンションセンター 2F ロビー 総合受付付近

整理券配布時間：8：00 ～ 11：30

セミナー開始10分後に整理券は無効となります。

共催：第48回日本小児感染症学会総会・学術集会／旭化成ファーマ株式会社

こどもの呼吸器感染症におけるワクチンの重要性、そして新たな診断・治療戦略

久留米大学医学部 小児科学講座 講師　津村 直幹

小児科領域では外来受診患者の約7割が感染症であり、その内の8割程度が呼吸器感染症である。

この中にはVPD、いわゆるワクチンで防ぐことのできる感染症も多く、特に乳児期の百日咳予防は重要である。近年、ワクチンの免疫効果が減弱した年長児や成人での百日咳が増加し、免疫のない乳児への感染源となることが危惧されている。百日咳の治療にはマクロライド系薬（MLs）が用いられるが、病初期の診断は難しく、また新生児や分娩後の母親へのMLs投与と肥厚性幽門狭窄症との関連が報告されている。百日咳においては病初期に使用でき、適切な抗菌薬の選択に役立つ検査の開発が期待される。

その他、小児期の侵襲性感染症予防として導入されたヒブワクチンと小児用肺炎球菌ワクチンの効果、そしてワクチン導入後の耐性菌の動向と肺炎入院率についても考察する。

次に、小児期に頻度が高い疾患である溶連菌や肺炎マイコプラズマ感染症など、ワクチンで防ぐことができない病気も多く存在する。

溶連菌性咽頭・扁桃炎の治療にはペニシリン系薬が第1選択薬であるが、最近セフェム系薬による短期治療が注目されている。また外来でしばしば経験する再発例についても考察する。

肺炎マイコプラズマ感染症治療の第1選択薬はMLsであるが、耐性菌が疑われる場合は年齢に応じて、テトラサイクリン系あるいはキノロン系薬への変更を考慮する。診断のgold standardはペア血清による抗体診断であるが、期日を要し、また痛みを伴う点など小児への実施が困難な面がある。最近になって、遺伝子検査・抗原検査キットが保険収載になった。LAMP法は感度・特異度ともに高いが、専用の機器が必要なため迅速性には課題が残る。一方、イムノクロマト法による抗原検査キットは臨床現場での迅速診断において有用性が期待されているが、感度の面で更なる改良が望まれる。